

半世紀ほど前までは、ソシュール研究とは 1916 年にソシュールの名を冠せられて刊行された『一般言語学講義』(以下『講義』と略す)で展開されている言語理論を主要な対象とする研究、というのが大方の理解であった。ところが二十世紀後半の構造主義の普及とともに、『講義』の影響は、言語学をはじめ、哲学、文学、人類学、精神分析など人文学の領域全般に及び、ソシュールは一躍「言語論的転回」のヒーローに祭り上げられ、『講義』を参照した言語論や記号論は、一時期百花繚乱の様相を呈したと言ってもあながち過言ではないだろう。

ソシュール=『講義』のこうした受容と並行して、ソシュール文献学の内部では、ゴデル、エングラ、デ・マウロによるいわゆる「原資料」の一定の調査検討が進んだ。『講義』の成立過程に潜む問題の一端に光があてられ、「原資料」と『講義』との間に横たわる相違が垣間見られたことは看過しがたい事実である。しかしながら彼らの研究においては、ソシュールの書き遺した自筆草稿や学生の聴講ノートはあくまでも『講義』の原資料 *sources manuscrites* という位置づけにとどまっていたのであり、『講義』の権威が大きく揺らぐことはなかった。その後ソシュールの文献学的研究は少数の研究者によって孜孜として推し進められてきたのだが、1996年にジュネーヴのソシュール邸で夥しい量の自筆草稿が発見され、その一部を含む自筆草稿がエングラとブーケの手によって『一般言語学著作』<sup>1)</sup>という書名のもとに 2002年にガリマール社から刊行されるに及んで、ソシュール研究はにわかに活況を呈することになった。以下に読まれるものは、このガリマール版の刊行された 2002年以後のソシュール研究の動向の点描である。

ガリマール版は、新たに発見された歴大な新資料の一部(「言語の二重の本質について」など)とすでにエングラによって出版されていた旧資料を収録しているが、収録された新資料の部分については、ドイツ語版<sup>2)</sup>(2003年)、デ・マウロによるイタリア語版<sup>3)</sup>(2005年)、アマケルによる校訂版<sup>4)</sup>(2011年)が相次いで刊行された。なお英語版<sup>5)</sup>(2004年)はガリマール版を、少なからぬ誤りを含めてそのまま英訳しただけに過ぎない。『ソシュール一般言語学著作集 I 自筆草稿「言語の科学」』(松澤和宏校註・訳、岩波書店、2013年)は、草稿に基づいて諸版を批判的に検討しつつ、ガリマール版の本文全体を再校訂し、校註および解題を付したものである。

ガリマール版の刊行以降、国際的な規模の研究集会や雑誌の特集号は目白押

しであり、まず最初にそのいくつかを時系列の順に挙げておこう。ブーケ編の *Cahier de l'Herne* (76, 2003) のソシュール特集号は、ガリマール版の拓いた地平を踏まえた質量ともに充実した画期的な論文集であり、*Cambridge companion to Saussure* (2004) もエングラヤーやブーケの論考を収めている。*Langages* 誌 (159, septembre 2005) の「言語学とディスクール」の特集号にはメシヨニックのソシュールと詩学に関する論考などを収めている。2006 年には「ソシュールとテキストの科学」<sup>6)</sup> と題した国際シンポジウムが名古屋大学で開催された。ソシュール生誕 150 年にあたる 2007 年にはジュネーヴ大学で大規模な国際シンポジウム「ソシュール革命」が催され、二冊の論文集に成果は示されている<sup>7)</sup>。日本では 2007 年に『思想』(岩波書店、2007 年第 11 号, n° 1003) が「ソシュール生誕 150 年」の特集号を唯一組んでいる。2008 年には『覚書』刊行 130 年を記念して、ジュネーヴ大学で「インド・ヨーロッパ言語学 一般言語学の揺籃」と題する研究集会が組織された<sup>8)</sup>。2009 年にはイタリアのカラブル大学で「ソシュールの手稿のデジタル化」をめぐる研究集会が催され<sup>9)</sup>、ジュネーヴ図書館などの協力の下にデジタル化や草稿の生成批評版が推し進められていくことが確認された。2010 年 8 月にはスリジーで「ソシュールと精神分析」のコロックが催され、*Langages* 誌 (185, mars 2012) は「ソシュールの草稿がもたらすもの」の特集号で文献学的検討と解釈上の問題を扱い、フランスの国立科学研究センターのテキスト草稿研究所 (ITEM) の機関誌 *Genesis* (35, 2012) は特集号「言語学的な身振り」でソシュールやバンヴェニストの草稿を生成論的角度から取り上げている。ソシュール歿後 100 年にあたる 2013 年には、*Arena romanistica* (12, 2013) がソシュールの草稿「言語の二重の本質」をめぐる特集号を組み、7 月にジュネーヴで大規模な国際言語学者会議が組織され、国際シンポジウムが 10 月に中国の南京大学で、11 月にソウル大学でそれぞれ開催された。

さて、新資料の発見とガリマール版の刊行に触発された近年の研究の動向の最大の特徴は、テキストへの回帰にあると考えて差し支えないであろう。もともとソシュールのテキストと今日呼ばれるものの八割近くは未刊行の断片的な草稿群である。それは、譬えて言えば、いったん入れば出口がもはや見あたらなくなるような果て知れぬ樹海であり、測量技師の入山を容易には許さない。このテキスト群は著者との関係の観点からは、以下のように大別されよう。(i) 『覚書』をはじめ、生前公刊されたインド・ヨーロッパ語に関する言語学的論文。殆どの論文が『論文集』<sup>10)</sup> に収録されている。(ii) 未刊行の自筆草稿 (内容は多岐にわたる)。(iii) 書簡などの私的あるいは伝記的な資料。(iv) 学生の聴講

ノート。(v) 二人の弟子の編著書としての『講義』関連の資料。

ここ十年余りのソシュール研究を振り返ってみると、(ii) を対象とした研究がかなりの進展を示していることがわかる。新資料の発見の後で文献学的アプローチが重視されるのは当然の成り行きであるが、テキストへの回帰は必ずしも生成論を特権的な方法として要請するわけではない。微に入り細を穿つ生成論的研究がしばしば或る種の精緻さを自己目的的に追求することに終始して、「木を見て森を見ない」類の視野狭窄に陥るケースも少なくないからである。

さて、近年の研究文献は汗牛充棟であり、紙幅の関係上ここでは五つの主題に分けて、いくつかの論考に言及し主要な論点を手短かに指摘するにとどめる。

(a) 言語一般を巡る考察およびインド・ヨーロッパ語に関する言語学的研究。

ソシュールの晩年の三回にわたる一般言語学講義（これはジュネーヴ大学当局の業務命令で行われたものである）の聴講ノートの一部は、1990年代に小松英輔によってパーガモン社から三冊刊行されたが、小松版は近年すべて邦訳された（『第三回講義』相原奈津江・秋津伶訳、エディット・パルク、2003年；『第二回講義』、2006年；『第一回講義』、2008年；『第三回講義 増補改訂版』、2009年；『ソシュール 一般言語学講義: コンスタンタンのノート』、景浦峽、田中久美訳、東京大学出版会、2007年）。ようやく晩年の一般言語学講義を『講義』の補足資料としてではなく、言わばそれ自体として——だが、「それ自体として」読むとはいかなることなのだろうか——読む道が拓かれたのである。しかしながら小松版も依然としてソシュールの一般言語学講義の全貌を伝えるには至っていないのが残念ながら実情である。各講義におけるインド・ヨーロッパ語に関するかなりの部分が省かれているなど不完全な校訂版にとどまっている。第三回講義に関してはコンスタンタンの聴講ノートの最初の完全版がメヒアにより2005年に刊行された<sup>11)</sup>。他の二回の講義に関しても完全版の刊行が現在準備中であることを書き添えておこう。

こうしたテキストへの文献学的回帰の動きと比べると、メヒアの著書<sup>12)</sup>がやや物足りない印象を与えるように、解釈の方は後手に回っている観が否めない<sup>13)</sup>。ソシュールの言語一般に関する考察に関しては、ラスティエによるラディカルな反・存在論的な読解<sup>14)</sup>と言語外の指示対象を考慮に入れたソシュールの草稿の一節<sup>15)</sup>を両極にして、その間に構造主義的解釈をはじめとする様々な解釈を位置づけることも不可能ではない。だが、その際二十世紀の構造主義や現代思想をソシュールに投影し、「体系」や「差異」や「価値」といった一連の概念を再認して能事終われりとするのではなく、そうした概念が歴史言語学の内

部に身を置いていたソシュールにおいてどのようにして誕生したのか、その経緯と内的な論理を、ソシュールの言語学的格闘に寄り添いながらたどることが必要であろう。特に日本では、ソシュールは、インド・ヨーロッパ語の言語学的研究から切り離されて、もっぱら哲学的思想家として受容されてきたために、こうした内在的理解に努めることが疎かになるきらいがある。

*Cahier de l'Herne* (2003) の特集号にリトアニア語のアクセントをめぐる草稿<sup>16)</sup>が公刊され、アクセントの同定の操作が差異や識別というソシュールの概念と緊密に結びついており、インド・ヨーロッパ語を対象とした言語学と言語一般の考察は密接不可分な関係にあったことが改めて示されている。「体系」という概念も、一見歴史言語学の書の印象を与える『覚書』からすでに生まれていたことを思い起こしておくべきであろう。管見の限りでは、ソシュール自身が自らの考察を「一般言語学」という術語を用いて規定している箇所は草稿には見あたらない。「一般言語学」という呼称は入念な検討を要するだろう。近年言語学において取り上げられることの多い〈文法化〉に関して、ソシュールの見解を探ったベグランの論考では、ソシュールが共時態と通時態の識別に執着した理由が当時の言語学の状況との関連で明らかにされている<sup>17)</sup>。

『思想』の2007年の特集号には、ソシュールのテキストに即した論考がいくつか読まれる。松澤和宏「デリダからソシュールへ」はデリダによるソシュール批判が19世紀後半にパロールへの関心が高まった言語学的文脈を無視したものとなっている点を指摘した上で、歴史言語学の主要な研究対象であった音変化から形態論的交替を識別していくことを通してソシュールの差異、記号、時間の概念が形成されていく理路を示している。阿部宏「比較文法を批判してソシュールが考えたこと」は、類推現象への着目を通して話し手の意識を重視していたソシュールが、主観性や文法化という今日の言語学的課題に対しては一貫して否定的な態度を取っていたのではないか、というプロブレマティックな論考である。川本暢「テキスト論を試みたソシュール」は稀にしか論じられないソシュールの博士論文「サンスクリット語における絶対属格の用法について」を取り上げて、絶対属格の行為と主節の行為の関係に時間的同時性を見ていることが、「記号学」の定義化に役立ったとする。小野文「不安の継承——ソシュールとバンヴェニスト」は、諸言語から言語一般を引き出そうとする時にソシュールを襲う不安に着目し、それがバンヴェニストに引き継がれ、言語と人間という主題に底流している事を指摘している。

ソシュールの草稿の判読転写や先駆的な論考を含む小松英輔『もう一人のソシュール』(エディット・パルク、2011年)は、ソシュールの講義の聴講ノート

とラングの言語学を唱える『講義』本文との間に横たわる相違を実証的に明らかにした論考を含む高度な研究書である。なお小松氏は長年にわたる闘病生活の末に昨年5月に逝去された。この場を借りて、ご冥福をお祈りしたい。

(b) 神話・アナグラム研究について。

神話研究の草稿の一部<sup>18)</sup>が刊行され、またアナグラムに関してはスタロバンスキーのアナグラム紹介の書<sup>19)</sup>が『ソシュールのアナグラム:語の下に潜む語』(金澤忠信訳、水声社、2006年)として訳出された。岡村民夫「ソシュールのアナグラム」(『思想』第11号、2007年)は、ラングによる抑圧に無意識やポリフォニーを対置するポスト構造主義的予断を斥けて、潜在的な主題語が音と意味の双方にまたがって詩句を内的に秩序づけるアナグラムをラングからパロールへの動的過程の中に位置づけようとする、ソシュールの草稿の丁寧な読解に基づいた説得力のある論考である。ホメロスの詩句のアナグラムに関する草稿の校訂版<sup>20)</sup>の出現は、これまで断片的にしか研究されてこなかったアナグラム研究がいよいよ本格化してきたことを示している。

(c) ソシュールと同時代の政治との関わりについて。

ソシュールの同時代のユダヤ人問題などの政治問題に関わるメモがホイットニー追悼論文と同じノートに書かれており、小松英輔とメヒアにより判読転写されて公刊された<sup>21)</sup>。互盛夫『フェルディナン・ド・ソシュール — 〈言語学〉の孤独、「一般言語学」の夢』(作品社、2009年)は、国民国家と19世紀の言語学との関係に着目した著書である。金澤忠信「ソシュールの政治的言説 — 19世紀の歴史的イベントとソシュールの政治的立場」(『フランス文学』第28号、日本フランス語フランス文学会中国・四国支部編、2011年)はジェイムソン襲撃事件、アルメニア人虐殺(1894-1896年)、ドレフュス事件などに関するソシュールの未刊行の草稿資料に丹念にあたって、ソシュールの保守的な政治観を丁寧に照らし出す貴重な論考である。ガンドンの『言語学者のモラル』<sup>22)</sup>も同じ問題を扱っている。

(d) 草稿や伝記的資料を精査した成果として、メヒア<sup>23)</sup>やジョゼフ<sup>24)</sup>の浩瀚なソシュールの伝記が刊行されたことも近年の慶賀すべき成果である。但し前者の精神分析的解釈がはたして正鵠を射ているのかどうかは議論の分かれるところだろう。

(e) ソシユールの受容について

加賀野井秀一『知の教科書 ソシユール』(講談社、2004年)は伝記、言語理論、受容にまたがる手際よいソシユール入門書であるが、特に受容に関して要を得た解説が読まれる。自筆草稿や聴講ノートが研究対象となるにつれ、『講義』は次第に影が薄くなっていくのは仕方がないにせよ、顧みられる必要も価値もなくなったのであろうか。『講義』から陰に陽に影響を受けることなしに、虚心坦懐にソシユールのテキストを読むことは果たして可能なのかと問われれば。厳密にはもはや不可能と答えるほかないだろう。『講義』で提示された諸々の考え方や概念はわれわれの免れがたい先入見の一部とすでに化している。内なる先入見を吟味検討していくために、『講義』は依然として無視できないテキストであり続けている。

以上見てきたように、近年のソシユール研究は、文献学的研究を中心としつつも、その裾野はソシユールの知的活動全体に、そして彼の生きた時代全体に次第に拡がりを増している。明確なソシユール像に収斂していくというよりも、むしろ多様化と拡散に近い印象すら受ける。ソシユールの書き残した言葉の叢生する樹海のなかで或る方法や理論を松明として解釈の歩を進めていく場合でも、状況に応じてその松明を敢えて消し、別の枝を折ってそれを新たな松明として歩き続ける心構えが必要とされよう。近年の研究が従来ソシユール像にどのような変更をもたらすのか、それを一言で言い表すことは時期尚早であろうが、近年の研究動向からおのずと或る種の方向性なり課題なりが浮かび上がってくることも確かである。すなわち、歴史的文脈を踏まえた総合的なソシユール理解である。言語一般に関わる考察、論じられることの依然として少ない『覚書』を含めたインド・ヨーロッパ語の言語学的研究、アナグラムや神話の研究、同時代の人文・社会科学や自然科学との関連、さらにはドレフュス事件をはじめとする同時代の出来事に対する政治的関心、それらを有機的に関連づけながら、言語思想史的位置づけをも含めて、ソシユールを総合的に理解する条件が今日ようやく、そして初めて、揃いつつある。テキストへの回帰とソシユールの生きた歴史的な文脈への沈潜を通して、従来ソシユール評価の批判的な捉え直しが求められているのではないか、という筆者の感想を記して、近年のソシユール研究の点描を終えたい。

2014 (平成 26) 年 3 月 3 日

註

- 1) *Écrits de linguistique générale*, texte établi et édité par Rudolf Engler et Simon Bouquet, Gallimard, 2002.
- 2) Ferdinand de Saussure, *Wissenschaft der Sprache: Neue Texte aus dem Nachlaß*, herausgegeben und mit einer Einleitung versehen von Ludwig Jäger, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag, 2003.
- 3) Ferdinand de Saussure, *Scritti inediti di linguistica generale*, introduzione, traduzione e commento di Tulio De Mauro, Roma, Laterza, 2005.
- 4) Ferdinand de Saussure, *Science du langage. De la double essence du langage ; édition des Écrits de linguistique générale*, établie par René Amacker, Genève, Librairie Droz, 2011.
- 5) Ferdinand de Saussure, *Writings in General Linguistics*, translated annotated and introduced by Carol Sanders, Oxford University Press, 2006.
- 6) 『ソシユールとテキストの科学』、名古屋大学文学研究科 21 世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」、2007 年 3 月。
- 7) Michel Arrivé (éd.), *Du côté de chez Saussure*, Lambert-Lucas, 2008. Jean Paul Bronckart, Ecaterina Bulea, & Christian Bota (éd.), *Le projet de Ferdinand de Saussure*, Genève, Droz, 2010.
- 8) *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 62, 2009, pp.5-100.
- 9) *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 63, 2010, pp.5-112.
- 10) *Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure*, Charles Bally, Léopold Gautier (éd.), (1922), Genève, Slatkin, 1970, 1984.
- 11) « Édition des notes d'Emile Constantin du Troisième Cours de Linguistique Générale (1910-1911) » établie par Claudia Mejía Quljano, *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 58, 2005.
- 12) Claudia Mejína Quljano, *La linguistique diachronique : le projet saussurien*, Genève, Droz, 1998.
- 13) 例えば、第三回講義の第二部「言語」における章立ての変更に着目して時間の位置づけ — 歴史的時間と伝統的時間との区別と連関 — がそこでは問題化し、ソシユール自身が「講義の綻び」を認めざるを得なくなっていることを明らかにした拙論を参照していただければありがたい。Kazuhiro

- Matsuzawa, « Le « décousu » du troisième cours de linguistique générale et le cercle herméneutique », in *Le projet de Ferdinand de Saussure*, Genève, Droz, 2010 (松澤和宏「ソシユールと『一般言語学講義』の間」、『生成論の探究 草稿・テキスト・エクリチュール』所収、名古屋大学出版会、2003年)。
- 14) François Rastier, « Le silence de Saussure ou l'ontologie refusée », in *Cahier de l'Herne*, 76, 2003.
  - 15) ソシユール『自筆草稿「言語の科学」』、岩波書店、168頁。
  - 16) « Notes sur l'accentuation lithuanienne », présentation et édition par Ludowig Jäger, Mareike Buss, Lorella Ghiotti, *Cahier de l'Herne*, 76, 2003.
  - 17) Marie-José Beguelin, « Les identités diachroniques dans la théorie saussurienne : une critique anticipée du concept de grammaticalisation », *Le projet de Ferdinand de Saussure*, Genève, Droz, 2010.
  - 18) « La légende de Siegfried et l'histoire burgonde », présentation et édition de Béatrice Turpin, in *Cahier de l'Herne*, 76, 2003.
  - 19) Jean Starobinski, *Les mots sous les mots. les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Gallimard, 1971.
  - 20) Pierre-Yves Testenoire, *Anagrammes homériques de Saussure*, Lambert-Lucas Editions, 2013.
  - 21) 小松英輔『もう一人のソシユール』266-306頁に収録されている。Claudia Mejía Quljano, « L'adresse et l'écoute, la dualité de la parole. À propos d'un texte politique dans le Ms.fr.3951/10 », *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 60, 2007. ソシユール『自筆草稿「言語の科学」』、349-350頁を参照。
  - 22) Francis Gandon, *La morale du linguiste, Saussure entre Affaire Dreyfus et massacre des Arméniens*, Limoge, Lambert-Lucas, 2013.
  - 23) Claudia Mejía Quljano, *Le cours d'une vie*, tome 1, Nantes, Cécile Défaut, 2008, tome 2, 2012.
  - 24) John E. Joseph, *Saussure*, Oxford University Press, 2012.